

英語教育における教科書研究の展望と課題

教職開発コース 王 林 鋒

The Prospect and Challenge of Textbook Research in English Language Education

Linfeng WANG

This paper respectively illustrates the development of generic textbook research and English language textbook research. The review of generic textbook research starts with the establishment of the field, then moves to the emergence of New Sociology of Education, and finally describes its research methodology as well. The development of English language textbook research is traced back to teaching material development in English-speaking countries. Following that, a survey of English language textbook research in Japan is approached from different viewpoints. In the end, some challenging topics are proposed, from the perspective of teaching English as a foreign language in Japan.

目 次

- 1 問題と目的
- 2 教科書研究の経緯
 - A. 教科書研究分野の成立
 - B. 新教育社会学における教科書研究理論の構築
 - C. 教科書研究方法論の概観
- 3 英語教育における教科書研究
 - A. 英語圏における英語教科書研究の系譜
 - B. 日本における英語教科書研究の系譜
- 4 今後の展望と課題

1 問題と目的

文部科学省検定済教科書は通常4年毎に改訂の機会があり、大幅な内容の更新が行われる。それに加えて、ほぼ10年毎に改訂される学習指導要領の告示の際にも、教科書内容の変更が求められる。教科書の更新にあたっては、議論の焦点となる項目を中心に変更前後の内容が比較され、解決策の是非が問われることとなる。このように、教科書の更新時期には変化した点のみが議論の中心となり、一面的な議論がなされがちである。より包括的に一貫した考察をするためには、教科書研究を背景として、英語教科書研究の流れを概観することによって、示唆を得る必要がある。

教科書研究は1970年代に学問領域として成立し、様々な視点から分析が行われてきた。しかし、教科書研究の成立前には、教育的内容を選択する基準や原則は、カリキュラム研究における中心課題であった。教

科の性質、学生の認知的な発達段階、社会需要および学校の社会的機能といった側面から、どのような教育的経験を学校知識としてカリキュラムあるいは教育課程に取り入れるのかが考察されてきた (Tyler, 1949; Pinar, et al., 1995; Jackson, 1992; Tannar & Tannar, 1995)。1990年代以降は、社会学的な視点から教科書内容が特定の意味と価値を埋め込んでいると認識され、知識内容の批判的分析が教科書研究の主流となっている。

英語教育は、実際には英語圏の国の外国語教育から始まるという指摘があった (沖原, 2012)。1950～1960年代のイギリスやアメリカの公教育において、フランス語、スペイン語などの言語が外国語として教えられ、一連の実験を実施することで多様な言語教授法が開発された。これらの教授法は各国における英語教育の現場に重要な影響を与えた。1980年代には、グローバル化の進展につれて、西洋諸語を対象とした外国語教育が第二言語・外国語としての英語教育に変更され、応用言語学に注目が集まるようになった。その中で、教材の開発を対象とする研究が現れてきた。

本稿の目的は、日本のような外国語としての英語教育における英語教科書研究への視座から、教科書研究の一般論および国内外での英語教科書研究の系譜を概観することである。教科書研究と英語教育の分野における知見を比較検討し、学際的に結びつけ、研究の道筋を提示する。英語教科書の研究は教科書研究の経緯を背景に展開してきたので、第2章では、既存の教科書研究を概観し、専門分野としての成立と理論の構

築の経緯を明らかにする。第3章では、英語教育における教科書研究の事情を明らかにするために、イギリスを中心に英語圏および国内の英語教科書研究を概観する。最後に2章と3章における内容を総括した上で、今後日本における外国語としての英語教科書研究の展望と課題を論じる。

2 教科書研究の経緯

A. 教科書研究分野の成立

教科書研究という学問領域の成立は、国際組織による国際理解教育において役割を果たす歴史教科書の研究から始まると言える。1920年代から第二次大戦後にも、ユネスコが歴史教育における教科書比較研究の重要性を唱え続けてきた。特に1970年代には、グローバル化に伴う以前の敵対国間の経済・政治危機を防ぐため、多国間にまたがる多面的な教科書研究方法が取り扱われた。1974年にユネスコはドイツのゲオルグ・エッケルト国際教科書研究所(Georg Eckert Institute for International Textbook Research Branunschweig)と提携し、現在に至るまで国際会議、プロジェクト、出版物、講演を通じて、国際理解の促進に力を入れ、教科書研究を発展させてきた(Nicholls, 2003)。

世界教科書比較研究の中心地として、ゲオルグ・エッケルト国際教科書研究所が1951年に設立され、ドイツをはじめ、世界の諸国の教科書における歴史、政治、地理に関する記述を比較することで、相互理解を図り、より客観的にするための取り組みが行われてきた。近年では、異文化理解と尊重を推進するやり取りを遂行するようになってきている。教科書内容の背景にある事実関係に関する評価や判断を提示することにより、生徒が自己自身で偏りのない判断力を生み出す能力を育成することが目指されている(中池, 2000)。その他、欧州連合も歴史教科書をめぐるヨーロッパ諸国の相互理解に大きな役割を果たしている。

B. 新教育社会学における教科書研究理論の構築

教科書研究の発端は多国間の国際理解を求める歴史教科書の比較であった。だが、学校教育において教科書の一般性を捉える研究は、教育内容自体の妥当性を問う新教育社会学の領域から生まれた。1971年にイギリスでM.F.D. Youngにより編集された本*Knowledge and Control: New Directions for the Sociology of Education*が従来の教育社会学の機能理論から解釈論へのパラダイムを転換し、「新教育社会学」(the New Sociology

of Education)と呼ばれた(Gorbett, 1972)。新教育社会学は知識社会学の理論に基づき、教育的知識が如何にコントロールされ、どのように処理されるか、及び知識と権利がどのような関係にあるかを探求する(Young, 1971)。批判的な社会学理論の影響を受け、新教育社会学では、教育的知識かつその媒体である教科書について微視的な視点から分析が行われた。とりわけ、教育的知識の認定、選択および評価といった、教育的知識の社会の組織問題を中心とした研究が進められている。

その中で、教科書研究の代表として挙げられるのは、“誰の知識がもっとも価値があるか?”という問題を提起したAppleである。教科書は合法的な知識と文化を確定し、知識の伝承に重要な役割をもたらす(Apple & Christian-Smith, 1991)。教科書における知識の選択や配分は、社会階級・経済権力・文化覇権の相互作用による産物であり、明示的であれ暗示的であれ、そこには価値観の対立が存在する。従って、教科書研究は、イデオロギーとカリキュラムの関係を明らかにするのに極めて重要な方法である(Apple, 2004)。さらに、Appleは、教科書にもたらすイデオロギーを解明する理論的な枠組みを開発し、教科書の価値観を吟味する研究に道を開いた。

C. 教科書研究方法論の概観

あらゆる研究視点の下で、以上の分析は、実証的に教科書を分析する研究の方法論も発展させていくこととなった。教科書研究の方法論を系統的に初めて論じたのは、ユネスコが教科書研究に携わる長年の経験を生かし、1999年に出版した*The UNESCO Guidebook on Textbook Research and Textbook Revision*というガイドブックであった。ここでは、教科書分析を行うにあたって配慮すべき事項が述べられた。とりわけ著者のPingel(1999)は、教科書研究の複雑さと偶然性を強調した。また事前準備作業を含む教科書研究の手順、可能な量的・質的分析手法と分析のカテゴリ化などに関する諸事項が述べられた。その主たる手法として以下の3点が挙げられる。すなわち、①テキストにおける隠れた意味とメッセージを解釈する解釈分析；②異文化・議論に関わる言葉と専門用語を検討する言語分析；③教科書の内容を分析し、登場団体にどのような情報・事象が求められるのかを考察する談話分析である。その中で、Crismore(1989)が修辞学の視点からアメリカの社会科教科書を対象とし、著者と読者の関係に注目し、メタディスコース分析を開発した。だが、

Pingelは、概論的に教科書研究を行う際の注意すべき事項を紹介したが、どのように教科書テキストを分析するのかを具体的に示さなかった。

教科書評価および教科書作成の方法について論じた研究者としては、東欧の研究者Mikkが挙げられる。Mikk(2000)は全体的にテキスト分析における質的手法の重要性を強調し、研究方法の信頼性・有効性がなければならないと指摘した。さらに方法論と認識論の緊密性から、分析手段が概念的なのか、あるいは実証的なのかという二つの可能性を提示したことは、Mikkによる内容分析を導くカテゴリーの作成を越えた重要な一歩であると言える。概念的な分析手段は分析する前に分析カテゴリーが組み立てられ、実証的分析手段は教科書サンプルをあらかじめ分析した上にカテゴリーを組み立てられる。

その後、2001年にStradling(2001)が、教師の重要性を認識し、研究者ではなく、教師向けに、教科書をどのように評価するか、さらにどのように選ぶかを、主に以下の四つのカテゴリーから論じた：①範囲、配列、シラバスなどの教科書内容；②学習者の学習と認知発達に有利かどうかといった教育的な価値；③還元主義の傾向や偏見などの内在的な要素；④値段、適応対象といった外在的な要素。認識論の視野を入れながら、これらの分析枠組みに基づき、作成者あるいは評価者の社会的・政治的な背景が、評価基準に影響を与えるという指摘がなされた(Nicholls, 2003)。

教科書が学習者に与える影響を評価するにあたってFoster(2002)による三つの分析手法が紹介された。それは、①イメージ・図・表などの提示方法を評価する視覚分析；②テキストの質問・課題などが学習者の記憶・批判的思考力を促進するかどうかを評価する質問分析；③教科書が含む特定のあるいは不公平な社会関係を露呈する批判的分析である。特にApple & Christian-Smith(1991)はアメリカの教科書を対象とし、教科書の生産から消費までに現れる覇権主義を、批判的に分析する手法を開発した。ここでは、教科書は実際に政治的な産物であるとされている。

以上のように、教科書のテキスト分析においては、様々な分野(解釈学・言語学・歴史学・社会文化学・記号学など)からの視点が見られる。研究目的により分析視点が異なるが、分析の信頼性を求めることが重要である。

また、教科書研究理論と方法論の関係から、現在の問題と課題が論じられた。Weinbrenner(1992)は、教科書研究のギャップとして、方法論が依拠できる教科

書理論の未成立、教科書使用効果を解明する実証研究の不足と、教科書研究を評価する信頼性の高い方法の欠如という三点を指摘した。同様に、主要な文献における教科書の方法論研究を概観した上で、Nicholls(2003)は今の方法論が未熟だと指摘しており、優れた教科書研究を保障できるのは系統的かつ包括的な分析枠組みと分析道具だと主張している。Nichollsの概観では、教科書研究という専門分野の成立事情から、調査対象は歴史教科書に関する研究が多かった。しかし、この研究は、教科書研究方法論の一般的な展開を探るのに、十分な情報を与えると思われる。

3 英語教育における教科書研究

A. 英語圏における英語教科書研究の系譜

英語圏では英語教科書に関する研究は、教材開発(materials development)という広い範囲の下で論じられている。ここでの教材は、教科書に限らず、言語学習を促進するためのあらゆる方式の材料を指す。前述した専門分野としての教科書研究の成立と同様に、英語教材開発の原則や手順を論じた著作も、1990年代に現れた。それ以前の英語教材は独立した領域ではなく、英語教授法に付属して、実施例として教師に紹介された。英語教材開発研究が注目を浴びるようになったことには二つの理由が存在する(Tomlinson, 2001)。一つは、言語学習の理論を正しく理解したり実施したりできるような教師の専門性を養成するために、教材を開発するプロセスの体験を教師に提供することが有効だと認識されたことである。もう一つは、すべての教室や学習者を満足させる教材が存在しないので、一つ一つの教室において既存教材を評価したり調整したりする教師の適応力が必要とされたことである。従って教師に教材開発の知識と能力が求められるようになった。

英語教材開発研究が重視されるにつれて、教材開発の諸問題を取り入れた在職教員研修課程や大学院の養成課程も増加している。さらに、英語教材開発を中心に研究活動を行う専門組織も、世界中に続々と現れた。イギリスでは、1993年にTomlinsonにより英語教材開発機関MATSDA(Materials Development Association)が創立され、2013年に国際英語教育学会IATEFL(International Association of Teachers of English as a Foreign Language)が教材開発研究部会を立ち上げた。アメリカでは、英語教師協会TESOL(Teachers of English to Speakers of Other Languages)が教材開発の会

報を刊行した。ヨーロッパでは、定期的に教材開発を主題にする会議が開催されている。日本でも、全国語学教育学会 JALT (Japan Association of Language Teaching) が教材開発研究部会の運営および学術誌の特集などを手掛けた。

英語教材開発はこのように教師の専門性を高める必要性を背景に成立した。今まで発表された研究の多くは、教材を評価する視点から行われた。初期の教材評価は、評価者が教材の目的あるいは学習者のニーズに即した教材のもつべき特質を列挙し、その基準と実の教材とを対照しながら評価を行うマッチング過程であったという指摘がある (Hutchinson & Waters, 1987)。その後 Sheldon (1987), Cunningsworth (1995) は全体印象レベルと深層レベルを分け、英語教材評価の方法を論じた。全体印象レベルは教材の基本状況や自らの経験からもつ教材に対する主観的な印象などを示す。それに対して、深層レベルは教材の思想や系統性を表す学習・教授方法、学習内容の組織と学習者のニーズや教師のスタイルに應える教材の適応性を問う。Cunningsworth (ibid.) はさらに教材評価を行う時間によって、使用前評価、使用中評価と使用后評価を区別した。多くの評価手法は教材の効果を推測する使用前の評価であるため、現場の教師には、時間、精力とともに特別な知識が求められることとなる。そこで、Jolly & Bolitho (1998) は教師が自らのアクション・リサーチを行いながら、教材使用中および使用後に表れる学習の状況を把握するよう試みた。

これらの研究では、教材評価の基準と判断を評価者の主観性に委ねる場合が多数であり、研究としての信頼性が欠けていると懸念された。Ellis (1997), Littlejohn (1998) は、より客観的な分析枠組みを提案し、既存の教材が、いったいどのような学習目的を達成できるのか、あるいは学習を促進するためにどのように学習者を支援するのかに着目している。彼らは教材を主観的に評価するよりも、教材そのものの特徴を描写する立場に立つと思われる。その一方、英語教材開発の理論に関しては、Tomlinson (1998, 1999) が普遍性を持つ分析枠組みを立てるには教材開発の原則と手順をあらかじめ明確にする必要があると提示し、理論的な原則とそれに基づいた柔軟性のある分析枠組みを提案した。

それまでの教材評価や分析枠組みという視点に留まらず、文化的産物として教材の生産・消費に関連するサイクルが考察されるようになり、教材が包括的に捉えられるようになった。Gray (2010) はイギリスで出

版されたグローバル英語教科書を対象とし、教科書が作成・使用されるプロセスについて文化的分析の視点から研究を行った。分析する要素は英語のアクセントや登場人物の職業、性別といった文化的内容である。これらの文化的内容が教科書流通のプロセスすなわち教科書の作成過程、執筆注意事項、教科書の使用を通して特徴付けられた。このような教科書の流通過程に着目して、Kiai (2012) はケニアの教科書を分析し、プロセスの各段階の特徴を浮き彫りにした。

B. 日本における英語教科書研究の系譜

英語圏の英語教育とは異なり、日本では外国語としての英語教育は学校教育の一環であり、国家カリキュラムに定められる。しかも、国の教育行政によって教科書検定と教科書採択・供給を規定する教科書制度が導入されている。これらの制度が機能することで、適切な教材が学校現場に供給され、学習者の学ぶ権利が保障されている。英語検定教科書制度に関しては、小串 (2011) が元文部科学省主任教科書調査官の立場から述べている。教科書制度の視点から英語教科書を研究することは極めて重要だが、本稿は英語教科書の内容実態に焦点を当てることにする。日本における英語教科書を対象にした研究は、おおむね構成要素分析、社会文化的分析、歴史的な分析と教材開発の原理の四つに分けられる。

2000年以降の英語教科書研究は、教科書基本構成要素からの分析が中心であった。すなわち、特定の文法項目への注目 (田川, 2008; 山本, 2010, 2011)、語彙のリズムパターン、重要語彙と語彙頻度の検討 (中村, 2003; 北本・高橋・森田, 2003; 甲斐, 2004; 高山, 2011)、発音と音声指導に焦点をあてた分析 (加藤, 2008; 上田・大塚, 2010)、題材の選択および国際理解への取り込み (藤井・川原・大西, 2003; 金田, 2005; 中村, 2009; 林, 2010)、言語活動およびタスクのあり方 (森岡, 2006; 長谷川, 2008; 白田・志村・横山, 2009) についての分析が行われてきた。また、教科書の根本的な部分である本文内容のテキストに触れた研究は、単語の難しさ・文の数・長さといったテキストの難易度調査や (中條・西垣・山保・天野, 2011; 与那覇, 2011)、ジャンル・テキストタイプ分析 (酒井・和田, 2012) が挙げられる。それによって、教科書における特定の要素の実態と選別方法が明らかにされてきた。

さらに、社会文化的な視点に着目した研究も行われてきた。イデオロギーと日本文化論の視点 (川又,

2005；江利川，2008；橘，2011），コーパス研究による文法と語彙の検証（中村，2006；佐々木，2007；岡田，2007），ジェンダー分析（鈴木，2005；長尾，2009；島田，2006）といった視点から，教科書が検討されてきた。それによって，教科書の作成に影響を与える社会文化的な要因が述べられてきた。

その他，歴史的な軸から見る英語教科書研究が進められている。教科書の資料集成や基礎データベースの作成をはじめ，日本の英語教科書の変遷を振り返りながら，今の教科書編成に示唆を与える歴史的な視野が取り込まれている。大村・高梨・出来（1980）が検定教科書制度以前の時期を含むそれぞれの時期の英語教科書の特徴を概観し，日本の英語教科書史の全貌を明らかにしようとした資料集成の第一人者であるという指摘があった（小篠・江利川，2004）。これらの製本資料に対し，江利川（2000）は電子化した検定英語教科書のデータベースを構築した。これらの資料集成は今後の教科書研究の土台を提供している。その上，過去の経験を参照しながら，現在の教科書作りに提言を与える研究が行われてきた。山田（2004）は総合的に1948年に出版された“Jack and Betty”の教科書と比較し，現行の教科書を批判的に分析した。また，江利川（2006）が戦前の英語教育を辿り，歴史を踏まえた議論を行った。

教材開発理論が教材作りの基盤であると主張する田中（1991）は，海外で主流となった英語教材開発理論およびシラバスを解釈し，教材開発に考慮すべき学習者要因および言語材料の選定を論じた。さらに，いくつかの英語教科書の評価表も提示された。これらの紹介は主に英語圏で行われた研究の概観となっている。小篠（1995）は1926年に出版されたPalmerの教科書の分析を行うことで，彼の提唱する教科書作成理論，特に英語オールラル教授法について考察した。

4 今後の展望と課題

本稿では，日本における英語教科書研究の視座より，教科書研究の一般論並びに国内外の英語教科書研究を概観し検討した。分析視点により研究の主眼も方法も異なるが，より多次元で包括的な研究が求められていると明らかになった。以下に日本における今後の英語教科書研究の展望および課題を三つ記す。

一点目は，日本での英語教科書研究が学校教育の英語教育を位置付けるべきである。Holliday（1994）は英語教育の世界を英語圏の民間英語学校の英語教育と，

日本のような国の学校教育の外国語としての英語教育の二つに分別した。前者は英語教育の理論，教材，情報の提供者であり，後者はそれを応用する消費者であると指摘された。両者の間に言語学習の共通性があると考えられるが，根本的な差異が見落とされがちである。それは英語学習の対象および目的の異質性である。サバイバル目的や道具的ニーズを求める成人の英語学習者と異なり，日本の公教育の学生においては，基礎的・人格形成的なニーズが第一義的ニーズである（沖原，2012）。近年の英語教科書を見ると，読解や書く活動の減少，オールラル重視の傾向が見られた。この異質性が存在する以上，日本の英語教科書作りに英語圏の環境で行われた第二言語研究の結果を完全に取り入れることには，懸念がある。

二点目として，外国語としての英語教科書の本文内容を学習者の観点から考察する必要性がある。これまでの本文内容を対象とした分析は選定すべきテーマや文化的要素に注目してきたが，テキストの構造に言及した研究が少ない。テキストを読んで情報をつかむためには，テキストのつながりを掴むことが前提である（Mackay, 1987）。このテキストのつながりとは，二文間，段落内の文間，段落間や談話全体での段落間の接続関係である。特にまだ十分に熟達していない読み手にとっては，これらはわかりやすさ（comprehensibility）に関連する重要な要素である（Chambliss & Calfee, 1998；Chou Hare, Rabinovits & Schieble, 1989）。特に日本では，改作された英文テキストが中学校低学年の教科書に多数掲載されており，これらのテキストが学習者にとって分かりやすいかどうかを検討することは，テキスト内容の質の向上並びに読解指導にもつながる。従って英語教科書の本文内容をテキストのつながりというわかりやすさの観点から捉える研究が必要とされている。

三点目は，実践者である教師が英語教科書を分析することを促進する働きかけが急がれている。教材を研究することで教師の教材開発の能力が高まるという認識は一般に共有されている。その中でも，特に教科書の分析を行うことによって，教科書の編成理念や各活動の配置を把握した上で，教師が使用する教科書の長所を生かしたり，短所を補ったりすることができる。しかも，学習者の状況に応じて自作教材を作成できる。しかし，どういう視点からどのような枠組みで教科書を分析するかは，教師にとって漠然としたものである。そのため，教師の実践に役立つよう，特定の視点ではなく，包括的な枠組みで実際の教科書を分析す

る手法を提示することが求められている。

引用文献

- Apple, M.W. & Christian-Smith, L.K. (Eds). (1991). *The Politics of the Textbooks*. New York: Routledge
- Apple, M.W. (2004). *Ideology and Curriculum*. New York: RoutledgeFalmer
- Chambliss, M. J., & Calfee, R. C. (1998). Textbooks for Learning: Nurturing Children's Minds. Malden, MA/Oxford, UK: Blackwell Publishers
- Chou hare, V., Rabinovitz, M. & Schieble, K.M. (1989). Texts effects on main idea comprehension. *Reading Research Quarterly*, 24(1), 72-88
- Crismore, A. (1989) Rhetorical form, selection and the use of textbooks. In Castell, S., Luke, A. & Luke, C. (Eds.). *Language, Authority and Criticism – Readings on the School Textbook* (pp.133-152). London: The Falmer Press
- Cunningsworth, A. (1995). *Choosing Your Coursebook*. Oxford: Macmillan Heinemann
- Ellis, R. (1997). The empirical evaluation of language teaching materials. *ELT Journal*, 51(1), 36-42
- Foster, S. (2002). *Methodological Issues and Approaches in Textbook Research and Analysis*. Unpublished instructional document, London: Institute of Education, University of London
- Gorbutt, D. (1972). The new sociology of education. *Education for Teaching*, 89, 3-11
- Gray, J. (2010) *The Construction of English: Culture, Consumerism and Promotion in the ELT Global Coursebook*. Basingstoke: Palgrave Macmillan
- Holliday, A. (1994). The house of TESEP and the communicative approach: the special needs of state English language education. *ELT Journal*, 48 (1), 3-11
- Hutchinson, T. & A. Waters. (1987). *English for Specific Purposes: A Learning-Centred Approach*. Cambridge: Cambridge University Press
- Jackson, P. (Ed.). (1992). *Handbook of Research on Curriculum*. New York: Macmillan
- Jolly, D. & Bolitho, R. (1998). A framework for materials writing. In Tomlinson, B. (Ed.). *Materials Development in Language Teaching* (pp. 90-155). Cambridge: Cambridge University Press
- Kiai, A.W. (2012). *Biography of an English Language Textbook in Kenya: A Journey from Conceptualization to the Classroom*. Unpublished PhD thesis, Coventry: University of Warwick
- Littlejohn, A. (1998). The analysis of language teaching materials: Inside the Trojan Horse. In Tomlinson, B. (Eds.). *Materials Development in Language Teaching* (pp.190-216). Cambridge: Cambridge University Press
- Mackay, R. (1987). Teaching the information gathering skills. In H.M., Long, & J.C., Richards (Eds.). *Methodology in TESOL: A Book of Reading* (pp. 248-258). Boston, Mass: Heinle & Heinle Publishers
- Mikk, J. (2000). *Textbook: Research and Writing*. Frankfurt: Peter Lang
- Nicholls, J. (2003). Methods in school textbook research. *International Journal of Historical Learning, Teaching and Research*, 3(2), 1-17
- Pinar, W. F., Reynolds, W. M., Slattery, P. & Taubman, P. M. (1995). *Understanding Curriculum: An Introduction to the Study of Historical and Contemporary Curriculum Discourse*. New York: Peter Lang Publishing
- Pingel, F. (1999). *UNESCO Guidebook on Textbook Research and Textbook Revision*. Paris: United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization/ Braunschweig: Georg Eckert Institute for International Textbook Research
- Sheldon, L. E. (Ed.). (1987). *ELT Textbook and Materials: Problems in Evaluation and Development*. ELT Documents 126. London: Modern English Publications / The British Council
- Stradling, R. (2001). *Teaching 20th Century European History*. Strasbourg: Council of Europe Publishing
- Tanner, D. & Tanner, L. (1995). *Curriculum Development: Theory into Practice*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall
- Tomlinson, B. (1999). Developing criteria for evaluating L2 materials. *IATEFL Issues*, 147, 10-13.
- Tomlinson, B. (2001). Materials development. In R. Carter & D. Nunan (Eds.). *The Cambridge Guide to Teaching English to Speakers of Other Languages* (pp.66-72). Cambridge: Cambridge University Press
- Tomlinson, B. (Ed.). (1998). *Materials Development in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press
- Tyler, R.W. (1949). *Basic Principles of Curriculum and Instruction*. Chicago: University of Chicago Press
- Weinbrenner, P. (1992). Methodologies of textbook analysis used to date. In Bourdillon, H. (Ed.). *History and Social Studies: Methodologies of Textbook Analysis*(pp.21-34). Amsterdam: Swets & Zeitlinger
- Young, M.F.D.(Ed.). (1971). *Knowledge and Control: New Directions for the Sociology of Education*. London: Collier-Macmillan
- 白田悦之・志村昭暁・横山吉樹(2009)「教科書におけるスピーキング活動のタスク性に関する分析—中学校英語教科書の場合」『HELES journal』9, 17-32
- 岡田毅(2007)「コーパス研究と中学校英語教科書—新しい動詞分類基準に向けて」『国際文化研究科論集』15, 99-114
- 沖原勝昭(2012)「EFL コンテキストと言語教育政策」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』42, 13-24
- 加藤みち子(2008)「中学校英語教科書に見る音声指導の扱われ方」『岩手大学英語教育論集』10, 49-65
- 橘広司(2011)「日本人における「苗字の重視」と英語教科書に見る呼称の問題: 「初対面」の場を中心に」『言語教育研究』1, 67-78
- 金田尚子(2005)「日本の中学校英語教科書にみる異文化理解: 題材の観点からの教科書分析」『英語英米文学研究』33, 129-149
- 江利川春雄(2006)『近代日本の英語科教育史: 職業系諸学校による英語教育の大衆化過程』東信堂
- 江利川春雄(2008)『日本人は英語をどう学んできたか: 英語教育の社会文化史』研究社
- 江利川春雄(2000)「データベースによる外国語教科書史の計量的研究(1) 文部省著作および検定済教科書」『日本英語教育史研究』15, 1-22
- 甲斐順(2004)「中学校英語教科書比較研究—語彙の頻度分析を通じて」『言語表現研究』20, 71-85

- 高山芳樹(2011)「中学校英語教科書語彙のリズムパターン分析」『英学論考』40, 37-51
- 佐々木正彦(2007)「コーパスによる検証：中学校英語教科書の人を先行詞とする関係代名詞thatをめぐる」『山形英語研究』11, 29-40
- 山田雄一郎(2004)「中学校英語教科書の分析と批判」『広島修大論集(人文編)』45(1), 149-203
- 山本和之(2010)「与格交替における構文選択—中学校英語教科書」『梅光学院大学論集』43, 55-68
- 山本和之(2011)「When節の位置選択について—中学校英語教科書」『梅光学院大学論集』44, 80-93
- 酒井英樹・和田順一(2012)「中学校英語教科書のジャンル・テキストタイプ分」『JALT Journal』34(2), 209-238
- 小串雅則(2011)『英語検定教科書—制度, 教材, そして活用』三省堂
- 小篠敏明・江利川春雄(編著)(2004)『英語教科書の歴史的研究』辞游社
- 小篠敏明(1995)『Harold E. Palmerの英語教授法に関する研究—日本における展開を中心として』第一学習社
- 上田洋子・大塚朝美(2010)「発音と音声のしくみに焦点をあてた中学校英語教科書分析：インプットの基礎を考察する」『大阪女学院大学紀要』7, 15-32
- 森岡浩希(2006)「コミュニケーション能力育成の視点による中学校英語教科書task分類」『立教大学英米文学』66, 63-95
- 川又正之(2005)「中学校英語教科書と英語帝国主義のイデオロギー」『筑波大学外国語センター外国語教育論集』27, 39-47
- 大村喜吉・高梨健吉・出来成訓(編集)(1980)『英語教育史資料第3巻英語教科書の変遷』東京法令出版
- 中村純作(2006)「教科書コーパスから何が見えるか：方法論と中学校英語教科書の場合」『立命館言語文化研究』17(4), 143-166
- 中村洋(2003)「中学校英語教科書における重要語彙の検討」『HELES journal』3, 39-53
- 中村洋(2009)「英語科の授業でどう国際理解教育に取り組むべきか—統計資料と中学校英語教科書の分析を手がかりに」『HELES journal』9, 33-48
- 中池さな恵(2000)「ドイツの国際教科書研究所の国際理解に果たす役割ユネスコ協同学校における国」『足利市平成11年度教育論文集』4-12
- 中條清美・西垣知佳子・山保本力・天野孝太郎(2011)「英語初級者向けコーパスデータとしての教科書テキストの適性に関する研究」『日本大学生産工学部研究報告B』44, 13-23
- 長谷川淳一(2008)「新版中学校英語教科書における言語活動の分析」『教材学研究』19, 277-284
- 長尾史英(2009)「中学校英語教科書におけるジェンダー分析」『飯田女子短期大学紀要』26, 37-46
- 田川憲二郎(2008)「be動詞の誤用と初学時の導入順序(言語教育編)」『Scientific Approaches to Language』7, 269-288
- 田中生道(1991)『コミュニケーション志向の英語教材開発アニュアル』開隆堂
- 島田洋子(2006)「新しい中学校英語教科書の描く男性像」『京都学園大学人間文化学会紀要』16, 19-30
- 藤井浩美・川原盛也・大西友一郎(2003)「中学校英語教科書における文化題材の特徴—異文化理解の視点から」『四国英語教育学会紀要』23, 21-29
- 北本洋子・高橋順子・森田和子(2003)「新学習指導要領にもとづく中学校英語教科書の語彙について」『横浜女子短期大学研究紀要』18, 37-46
- 与那覇恵子(2011)「英語の教科書の比較分析—韓国の小学校・日本の中学校」『名桜大学総合研究』18, 1-14
- 林千賀(2010)「日本の中学校英語教科書分析—異文化間コミュニケーション能力育成の観点から」『成蹊人文研究』18, 43-52
- 鈴木卓(2005)「中学校英語教科書におけるジェンダー・バイアス：機能文法を用いた分析」『フェリス女学院大学文学部紀要』40, 19-28

(指導教員 秋田喜代美教授)